

発行人 ● 杉浦賢次 / 編集人 ● 柳川幹司

東京都港区芝浦3-2-22町交通ビル2FTEL(5444)0510 / FAX(5444)0303http://www.rengo-tokyo.gr.jp/

平昌でメダル奪回をめざす氷上の大ベテラン

パラアイスホッケー・日本代表副主将

たかはしかずひろ

高橋和廣さん 西東京市職員

パラアイスホッケーの日本代表が2大会ぶり5度目のパラリンピックに出場します。10月にスウェーデンで行われた最終予選で日本は、ドイツ、スウェーデン、スロバキアを撃破し5カ国中2位となり見事本大会への出場権を獲得しました。代表チームの主力であり、副主将を務める高橋和廣さんは、自身4度目の出場に向けてメンバーを力強く牽引し続けてきました。

今回は、2010バンクーバー大会以来のメダル奪回をめざす大ベテランの高橋さんに、パラアイスホッケーとの関わりをはじめ、これまでの国際大会の記憶、そして平昌への熱い思いをお聞きました。

(インタビュー担当：連合東京副事務局長 柳川幹司)

大学3年まではアイスホッケーのアスリート スノーボードでの事故が人生の転機に

——パラアイスホッケーの日本を代表するベテラン選手である高橋さんですが、この競技と出会うまでにはどんな経緯があったのですか？

高橋 ● 生まれ育った街ではアイスホッケーが盛んに行われていたこともあって、子どものころからアリーナに通い日本リーグや大学リーグの試合を何度も観戦しました。小6からは地元のジュニアクラブ(西武ホワイトベアーズ)に所属してプレーもしていました。

続けていくうちに本格的に競技をしたいという気持ちが強くなり、高校からはより高いレベルをめざして、岩手県の盛岡中央高校でプレーを続け、インターハイにも3年連続で出場しました。金属工学を学ぼうと入学した千葉の大学でも、体育会のアイスホッケー部に入部して競技生活を続けていたんですが、卒業後も実業団でプレーするほどのレベルまでには達していなかったと思います。

そして2000年の冬。もうすぐ4年生という時期に本業の



写真提供：小金澤周平 / 公益財団法人苫小牧市体育協会

高橋和廣さん PROFILE

1978年12月、保谷市(現西東京市)生まれ。盛岡中央高校～千葉工業大学金属工学科卒。小学生時代から地元のJr.クラブに所属しアイスホッケーに親しみ、高校では3年連続でインターハイに出場。大学でも競技生活を継続していた中、3年生の冬にスノーボードプレー中の事故で脊髄を損傷し車イスの生活に。事故数カ月後には活躍の場をパラアイスホッケーに移し氷上に復帰。2002ソルトレイクシティから3大会連続でパラリンピックに出場し、2010バンクーバー大会では準決勝で開催国カナダを破り、日本初の銀メダルを獲得。世界選手権にも計7度出場している。所属クラブは東京アイスバーンズ。

2010年
バンクーバー大会の
銀メダル



写真提供：小金澤周平／公益財団法人苫小牧市体育協会

卒業研究のテーマも決まり気持ちが緩んだんでしょうか、休日に友人と楽しんだスノーボードで転倒し、脊髄を損傷する大ケガを負ってしまったんですね。その後はベッドから天井しか見えない日々が何日も続きました。食事も自分一人では思うように摂れない不自由さには屈辱感が大きく、アイスホッケーのことなどは全く考えないようになっていきました。

約半年がたって退院が近づき、新しい生活への身体の適応はもちろんですが、社会に何とか復帰するためには「心のリハビリ」が必要でした。そして、入院中からお世話いただいたリハビリの先生が退院してすぐに私を連れて行ってくれた場所が、なんとアイスホッケーのリンクだったんですね。

最初は簡単だと思ったパラアイスホッケー しかし選手のスピードについていけなかった

しかし訪れたそのリンクでは、選手たちが座ってホッケーをしていたんです。ケガをする前、たしか98年の長野パラリンピックのニュース映像で同様の光景を観て、「なんで座ってホッケーをしているんだろう？」と訝しく感じた記憶を思い出しました。

そして私も実際にプレーしてみようということになり、リンクに降りましたが、アイスホッケーをプレーするためにどう動いたらいいかは「自分の体がイヤというほど熟知している。だから簡単だろう」と思って始めてみました。

ところがスレッジ(手漕ぎのソリ)に乗ってスティックを使って漕ぎ出しても、ほかの選手たちのスピードにまったくついていけなかったんです。だから最初は「面白くないスポーツだ」と感じたんですね。

でも時間が経つにつれて「別のもの」だと思っていたこのスポーツに夢中になりはじめていた自分がいました。「ホッケー歴では絶対に負けない!」という生来の負けず嫌いがそうさせたこともあったでしょうが、リンクに降りて馴染み深い「氷の匂い」を感じたときに、「またここに戻ってこれたんだな」と。

——不自由さを乗り越えて、まさに運命的なパラアイスホッケーとの出会いがあったんですね。

高橋●もし最初からそれなりにやりこなせていたら、パラアイスホッケーに長く染まることはおそらくなかったらと思います。それくらい最初は下手くそでしたね、本当に。ところが1年も経たないうちにどんどんハマっていきまして…。

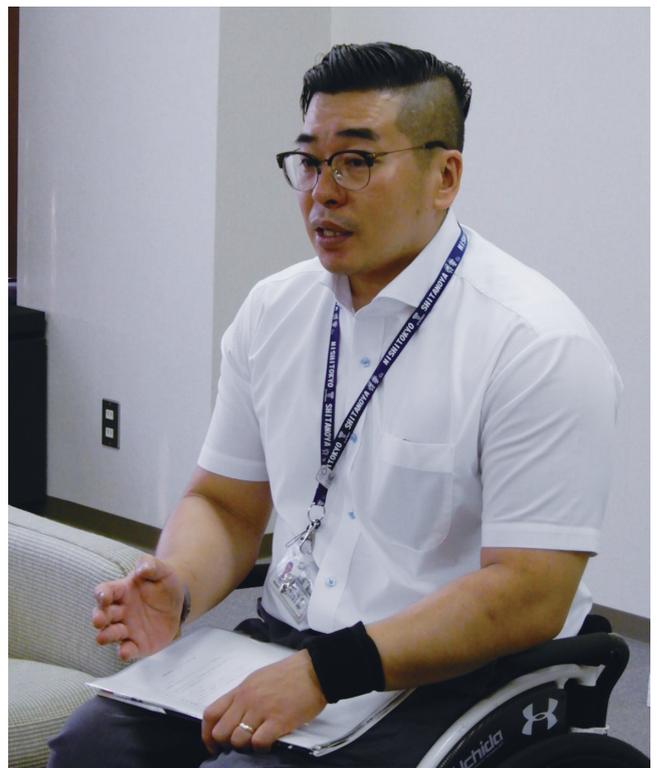
ふつうは障害をもってまでアイスホッケーをしようという人はいませんよね。だから私はただのホッケーバカなのかもしれません。「これしかできない」という価値観も後押ししたんだと思います。気がついたら日本代表になってパラリンピックをめざす立場にまで勝手に駆け上がっていました。

そして2002年。まだ実力は全然足りないレベルだったんですが、協会がチームの将来性を優先する方針を立てたことによって、なんとソルトレイクシティパラリンピックの代表メンバーに選出してもらえたんです。でも、このときは出場時間も少なく、出た試合でも自分の力不足を痛感するだけの大会になりました。

不甲斐なかったですね、自分が。結果を残すようなプレーはまったくできませんでしたから、とにかくこの経験を次につなげなきゃいけない。その思いだけを強くした初出場でした。

思い出したくないトリノの惨敗 そしてバンクーバーでの奇跡の銀メダル

——その後、世界選手権もはさんでパラリンピックには2006年のトリノ、2010年のバンクーバーと連続して出場されましたね。



とても熱心にインタビューに応じてくださいました

高橋●トリノ出場前の一時期には、日本協会が派遣する5人のうちの1人に選ばれて、アメリカのNHL(プロアイスホッケーのトップリーグ)傘下のパラのクラブチームに武者修行に出かけました。一度行ったら1ヶ月間ホッケー漬けの毎日、練習は毎日夜中。帰国してしばらくしたらまた出向くというパターンを数回経験しました。

先方のクラブにはソルトレイクの金メダリストたちや、当時のアメリカ代表の若い選手たちもいて、ハイレベルな環境の中でスピードとパワーを磨き、スキルを身につけました。滞在中には現地でカナダ代表と交流試合を行い、コテンパンに倒すという痛快な経験もできました。



インタビューする、柳川副事務局長と後藤西東京市職員労働組合委員長

普段の大会のときももちろんですが、この武者修行の期間とはとくに職場の多大な理解をいただき、本当に感謝しています。

しかしトリノの本番では散々な結果に終わってしまいました。代表チームがまとまりを欠き、主力選手の何人かが現地環境に合わず体調を大きくくずしてしまったり、精神的に参ってしまった選手もいました。しかし何よりの原因は、海外修行した主力選手に偏りすぎたチームプランが、メンバー間の協調を阻害してしまったことでした。最終順位はソルトレイクと同じ5位でしたが、順位以上に惨敗感が大きい大会でした。いまでもあまり思い出したくない経験になってしまいました。

ただ、この大会で日本代表が内包していた膿は全部出せたと考えよう、そう自分に言い聞かせましたね。

——しかし、次のバンクーバーでは世界中が称賛する見事な活躍を果たしました。本当に感動的な出場になりましたね。

高橋●準決勝で優勝候補筆頭の地元カナダと対戦し、3-1で勝利するという奇跡的な結果を残せました。結果以上に感動したのは、試合後に地元の観衆のみなさんが私たちにスタンディングオベーションを贈ってくれたことです。



市役所が用意したバックパネルの前で

準決勝であまりに大きい達成感をもってしまったことで、決勝ではすでに燃え尽きていたというのが正直なところでした。銀メダルはたしかに名誉なことですが、最後に負けた後でもらうメダルが「銀」なんですよ。しかしチームとして自信をもつことができた大会でもありました。次は金メダルも夢じゃない、と。

バンクーバーで成果を残せたのは、チームスタッフがチームのまとまりを重視したことが大きかったと思います。ただし、この大会を最後に現役を退く選手たちも少なからずいて、次の大会にはまったくの白紙から臨むことになるだろうと、この時点から感じていたのも事実です。

自分の経験したものを後輩に盗んでほしい 地域の小学生ともふれあう活動を継続

——世界の強豪国にのぼった日本ですが、次のソチ大会では、意外なことに出場権を逃してしまいました。

高橋●チームの世代交代がうまく進まなかったことが最大の原因でした。ソチ出場を逃し、私としてもふつうなら「この辺が潮時かな」と覚悟を決める年齢にきていました。しかし実業団でアイスホッケーを続けてすでに引退していた知人から、「自分の中で整理がつけばやめればいい。でも、まだできるなら続けろ」という助言をもらいました。

自分の場合、職場にはとても恵まれている。だからパラアイスホッケーに恩返しをしよう。自分が積み重ねてきたものを、若い選手たちに盗んでもらいたい。それができるまでは、もっと後輩たちと触れ合う時間を継続しようと決意したんです。

バンクーバーの後からは、自分の経験を地域の子どもたち



写真提供：小金澤周平 / 公益財団法人苫小牧市体育協会

にも伝えていく活動にも取り組んできました。小学生たちに話していることは4つあります。

1つは、「自分が自信をもてるものを見つけよう。それは困難な時に自分の支えになるから。人と比べる必要はない。僕の場合はホッケーです」

1つは、「いろんなことにチャレンジしよう。誰かにやらされるのではなく、自ら挑戦すれば失敗からも多くのことを学ぶことができる」

1つは、「人生には光と陰が繰り返される。私には大ケガもあった。でもその後日本代表選手になることができた。バンクーバーは光、ソチは闇。光の時間は短いけれど、陰の長い時間にどれだけ努力できたかが大事。いまでも現役選手を続けられているのは陰の時間を大切にしたから」

最後は、「人を大切にしよう。僕は1人ではなにもできなかった。ドクター、ナース、リハビリの先生、家族、友人たち。人々のおかげで自分は生きていることを忘れてはいけない」

そんなことを話させてもらっています。

——いまのお仕事は勤続15年になるとうかがいました。競技生活を続けられるのは、職場の理解が大きいというお話ですが、その通りですね。

高橋●大会の遠征や合宿などでは、いつも役所の職場のみなさんから本当に温かいご理解と応援をいただいています。一言では言い切れない感謝の気持ちでいっぱいです。

ただ、普段の練習から職場に迷惑をかけ続けるわけにもいきません。選手たちにもそれぞれの仕事がありますから、平日の練習はいつやればいいのか？

私たちは毎回夜中の3時ごろに集合してリンクを借り切って短時間集中で行っています。これを聞いて驚く方もたくさんいますが、それぞれの仕事の合間を工夫すると、そういった時間帯になるのも当然のことです。だから生活時間にメリハリをもてないと競技を継続していくことは難しいですね。

よく健常者のスポーツでは雇用先のアスリート採用という形式に不安があります。とくにトップアスリートの人たちほどセカンドキャリアが淋しいものになりがちなのが実情です。仕事をしながらスポーツを続けることの大切さを理解すれば、その人の人生にも大きな財産になるはずですね。

どうやれば継続していけるかを常に考えて毎日過ごしているつもりです。そのためには人の意見を素直に聞くことが大切だと思っています。会話をすることで糸口が見つかることは多いですから。

私の場合、15年勤続できていることは西東京市のおかげだと思っています。自分の意気込みだけでは実践できない、職場の理解・協力があってのことですから、仕事は常に精一杯やらせてもらっています。

"根拠のない自信"を武器に 本大会でのメダル奪取をめざす

——さて、平昌パラリンピック出場に向けた最終予選が目前に迫っています。スウェーデンで開催され、5カ国の上位3カ国が出場権を得られるわけですが、勝算はどうでしょうか？
高橋●最初の2試合をなんとか戦ってかならず3位以内に入りたいですね。とくに初戦のドイツ戦がカギを握ってくると思っています。

大舞台を前にいつも自分が心がけているのは「根拠のない自信」で立ち向かうことです。練習は裏切らない、とよくいいますが、練習量が勝てる根拠になるわけでもありません。しかし挫けずに練習を続けることで「根拠のない自信」を積み上げていくしかないと思っています。

平昌は東京大会の1つ前のパラリンピックということで、メディアの注目も高まってきています。選手にはいろんなタイプがいるなかで、みな等しくプレッシャーを受けることになりますが、どれだけ精一杯の準備をできるかによってプレッシャーも追い風に変えることができます。

先輩たちに教えられ、いま私が後輩たちに伝えたいのは「練習では自分が一番下手だと思え。試合では自分がスーパースターだと思え」という言葉です。

かならず最終予選を勝ち抜いて、平昌の本番では2大会ぶりのメダルを狙いにいきたいと思っています。

——今日は、どうもありがとうございました。

※インタビューは最終予選前の9月下旬に実施しました。



丸山西東京市長と職員のみなさま